

## 油山の宝物さがし ～江戸時代の風景～



森を育てる会が活動する油山は都心近くの身近な自然という市民のオアシス！園芸種の植栽で目を楽しませる市民の森、元々の二次林を活かした私たちの活動地・自然観察の森、牛や小動物の牧場も～も～らんどなど様々な魅力をもっています。

森を育てる会ではカブトムシの森をクヌギやコナラが主体の森に、常緑樹が侵入した森をアカマツ林にむけて管理しています。森が農業用の堆肥や薪炭林として利用されていた昔の姿に復元することで希少になった自然の姿や生き物を取り戻そうとしているわけです。

近年会員から「油山では昔どのような地域の人の暮らしと森のつながりや利用があったんだろう？そこにこれからの森と市民のつながりを考える宝物があるのではないかな？」という声が出てきました。ということで「油山の宝物さがし」と

いう新たな森へのアプローチを試みるようになりました。来年度活動日にみんなで宝物さがしができるといいですね。その準備として今年度は森と人のつながりについて昔の本と地図の2方向から宝物さがし準備を始めました。皆さんにも少しずつお伝えします。

まず昔の油山はどんな風景だったのでしょうか？18世紀の画家奥村玉蘭は「筑前名所図会」（中村学園大学「貝原益軒アーカイブ」より）で油山の風景を描いています。麓からみていくと川沿いに集落があり周囲に竹類がみられます。中腹にはお寺、谷部には細い杉、山の上のほうにたくさんのマツがあります。市民の森一帯は江戸時代マツ林だった様子です。今では少なくなったマツ林は誰がどのように利用して成立したのでしょうか？そんなことを考える宝物さがしの旅を始めたいと思います。（松&柴）